新年元旦礼拝
２０２３年1月１日（日）
題　「 神に召された群れ」
テキスト：ローマの信徒への手紙１章1～7節

皆さん、おはようございます。
新年おめとうございます！
クリスマスの光に包まれて２０２３年の新年・元旦礼拝に集えました事をうれしく思い、神さまに感謝します。
皆さまと教会につながるお一人お一人に、つながるご家族にご神さまの平安をお祈りいたします。
　さて、理学博士で理論物理学者の佐治晴夫さんの言葉が目に留まり心に残りました。次のような言葉です。「過去は新しく、未来はなつかしいのかもしれませんね」と。最初はちょっと驚きました。内容が反対ではないかと思ったのです。どこか、謎解きにも思えました。
「過去は新しく」とありますが普通は、過去は古いのではないかと思うのです。また「未来はなつかしいかもしれませんね」とありますが、普通は未来ではなく過去がなつかしのではないだろうかと、思います。未来は不明という感じがします。
　このことば補足の文に以下のことばが記されていました。今が満たされた境遇でないと、人はつい過去のせいにする。だが記憶はその時々の心情によって塗り替えられるもの。過去の評価もこれからの自分の身のふり方で決まると、理論物理学者は言う。つまり「これから」が「これまで」を決めるのだと。だから無闇（むやみ）やたらと過去にこだわるのではなく、「これから」を見つめ、一歩踏み出そうと。随想集「この星で生きる理由」から、とありました。「なるほど」と思いました。
　過去にどんなに辛いことがあったとしても、これから先の自分の生き方によって、過去の評価も変わる、ということあのでしょうか。とすれば、過去の辛いことを辛かった時期のことを、忘れることはなくても場合によっては、なつかしく思えるかもしれない、その意味で辛かった過去の中に新しいものを見出すことが出来るかもしれない、また、これからの未来になつかしい出会いがあったり、楽しみや喜びを持てるのかもしれないとも思わされました。讃美歌にも天の御国での懐かしい再会が歌われています。
　ともかく今年を、前向きに生きてなつかしさを心に覚えて大切に生きて行きたいものだと思わされます。音楽家バッハの合唱曲に「新しき歌を主に向かっ

て歌え」とあります。昔、よみがえられた主イエスに出会ってなつかしさを感じた昔の弟子たちから信仰者の新しい生き方が始まったことを覚えておきたいと思います。

ところで、今日のローマの信徒への手紙を書いた伝道者パウロです。

パウロは、キリスト者の迫害者として有名ですが、イエス・キリストを 2000 年前当時の世界に伝えた伝道者としても有名です。今日のローマの信徒への手紙は、パウロがローマにいるキリスト者の群れ宛に書いた手紙です。この手紙に書かれている内容は、後のキリスト教会やキリスト者に大きな影響を与えました。

パウロはとても熱心なユダヤ教徒でした。イエス・キリストの教えには大反対て各地で反対運動を起こし、キリスト者を迫害して捕えようとして回った人物です。

パウロは、キリスト教徒のステパノの石打ち刑の時にもそのそばにいて関わっていました。後にパウロは「自分は罪人の頭」であると告白しています。

この告白はステパノ事件との関係が深いと思われます。

しかし、使徒言行録に記されていますようにパウロは、キリストの弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んでダマスコという町に向かう途上、突然、天からの光を受けて地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」とイエスの呼びかける声を聞いたのです。この出来事をきっかけにして、パウロは、180 度生まれ変わり、イエス・キリストの迫害者から、イエス・キリストを伝える者へと生まれ変わったのです。まさに新生体験、新しく生きる体験、生き直す体験だったのです。大迫害者パウロが、大伝道者パウロに生まれ変わったのです。

イエス・キリストを伝える使者となった伝道者パウロは、当時の世界の都、ローマまでイエスのことを伝えたい思いにかられ、様々な迫害と困難な中、身を挺して、祈り、考え、行動した人物でした。彼はなかなか希望通り、ローマに行くことはできませんでしたが、最後、キリスト者として逮捕されるという不思議な手段でローマに行くことが出来たのです。ここにも神の計画があったことを思わされます。

ローマにいるキリストの群れを思い、書いた手紙がこのローマの信徒への手紙なのです。

年の始めにこの手紙の冒頭「挨拶」の部分が読まれました。共にみことばに聞きましょう。

◆挨拶

1:キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使
徒となったパウロから、――
「神の福音」とありますが、「福音」とは「良い知らせ」という意味です。

旧約聖書では、この福音という言葉は「戦争に勝利した知らせ」として用いられていたとのことです。
新約聖書では、神さまからの良き知らせのことです。神さまがひとり子イエスをこの世に生まれさせたという喜びの知らせです。マルコによる福音書では 1 章 15 節にイエスご自身の言葉で、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」とあり、福音をいう言葉が出て来ています。また「福音・良き知らせ」を信じるとは、「福音・良き知らせの中に入って信じる。」ことと言われます。イエス・キリストを信じる、そしてついて行くという体験、これが福音の中に入ることです。それはちょうど、パウロが光に包まれてイエスの声を聞いたように、福音の中に入るのです。ちょうどお風呂の中に浸かるようにです。
2:この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、
神さまの良き知らせは、旧約聖書の中に、すでに記され、約束されているとパウロは言います。そして、その良き知らせの内容は、
「3:御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、」と言われ、これは、イエスに関するものです。イエスは人としては、イスラエルの紀元前 10 世紀のイスラエルを統一した王であるダビデの家系に属しているといるのです。
また、
4:聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定
められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。
「聖なる霊によれば、」とは神さまの力、また神さまの熱い心、思いによれば、イエスの十字架の死の後、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたということです。
また、パウロは、自分を含めて、5 節で、
5:わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信
仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。
いつか訪問したいと切に願っていたローマのキリストの群れの人々に自己紹介をしています。そして、ローマのキリストにある人々自身については、
6:この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召された
あなたがたもいるのです、と語りかけています。

ここには、心熱い伝道者としてのパウロの心意気と教える者としてのパウロの姿が読み取れるようです。

パウロは手紙や挨拶の最後にいつも生ける神を讃える賛美を告白します。

> 7:神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

今日は、この「ローマの人たち一同へ」の所に、「洲本教会の人たち一同へ」と入れて、パウロからの手紙と思って読んでみたいと思います。「神に愛され、召されて聖なる者となった洲本教会の人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

パウロだけではなく、イエスに従い、天に召された人々の祈りと言葉は、時と場所を超えて、今を生きるわたしたちをも包んでいることを信じます。

今年、２０２３年、ここに集うわたしたち、どのような中にあっても十字架に死なれたイエスを甦らされた神を、ほめ讃えながら希望を持って、共に歩みたいと願います。

主の平安を祈ります。